＜研究報告＞

こども食堂の質的向上に関する一考察
―社会的インパクト評価を用いて―

片山　寛信*

抄録：

本稿はこども食堂の利用者にアンケートを実施し、こども食堂の利用者が主観的に捉えているこども食堂の効果や、期待したいことなどから、こども食堂の質的向上について、「保健衛生環境の整備」、「安定的な運営」、「豊富な体験メニューの提供」、「個別支援機能の強化」、「多世代交流拠点としての地域貢献」の５つの視点で考察をおこなった。

調査はA市B地区にある、Cこども食堂を利用している20歳以上の利用者に対し、質問紙を配布する集合調査法で実施した。

こども食堂の質的向上に向けては、こども食堂単体での取り組みとせず、地域にある様々な社会資源との連携が必要である。こども食堂という場が、地域における分野を超えた多機関、多職種の支援者が集まることができる、地域のハブ的な役割となることが重要ではないかと示唆された。

こども食堂はその地域ごと、こども食堂ごとの独自性と多様性があるため、質的向上に向けては、各こども食堂が利用者とともに実施する、定期的な事業内容の振り返りが必要であると考えられる。

キーワード：こども食堂・社会的養育・社会的つながり・地域共生・社会的インパクト

１．はじめに

こども食堂は近年急速に増加し、全国こども食堂支援センターによると、2019年現在日本全国各地におよそ3,700箇所以上あるとされている。こども食堂には明確な定義はなく、NPO法人全国子ども食堂支援センターむすびえのホームページによると、こども食堂とは、「民間発の自主的・自発的な取り組み」で、「子どもが一人でも行ける無料または低額の食堂」であるとされている。こども食堂は厚生労働省としても、『子ども食堂の活動に関する連携・協力の推進及びこども食堂の運営上留意すべき事項の周知について』の中で、「困難を抱える子どもたちを含め、様々な子どもたちに対し、食育や貴重な団らん、地域における居場所確保の機会を提供しているという意義を有しているもの」（厚生労働省2018a：２）とその役割を認め、行政、こども食堂を取り巻く地域住民、福祉教育関係者、社会教育施設などに対し、こども食堂の活動への協力を求めている。

こども食堂に関する先行研究では、こども食堂を運営する実施者側を調査対象としているものがほとんどである。こども食堂利用者の、こども食堂に対する考え方や捉え方を明らかにすることは、こども食堂の質的向上や、社会的効果を可視化する上で有用な情報であるといえる。そこで、本研究では、社会的インパクト評価のプロセスを参考に、A市B地区で活動をおこなっているCこども食堂の利用者にアンケートを実施。Cこども食堂の利用者が主観的に捉えているこども食堂の効果や、期待したいことを明らかにし、こども食堂の質的向上について考察することを目的とする。

２．方法

A市B地区にある、Cこども食堂を利用している20歳以上の利用者に対し、集合調査法で実施した。質問紙の配布は、こども食堂開催日である2019年１月18日と、１

＊臨床福祉学科　社会福祉学講座

月26日。両日合わせて18名の回答を得た。回収した質問紙を単純集計、自由記述はKJ法を参考にグループ分けをおこなった。

調査項目は、子育て支援センター利用者アンケート（名古屋市：2013）や道岡・中村・岡田ら（2004）の先行調査を参考に、Cこども食堂の参加回数、自宅からの移動手段や所要時間、主観的な満足度、こども食堂に期待することなどについてとした。さらに、町田・長井・吉田（2018）の先行研究を参考に、利用者が主観的に捉える、こども食堂の効果について調査をおこなった。Cこども食堂の基礎データについては、Cこども食堂の代表者に直接確認をおこなった。

3．倫理的配慮

本研究では、調査対象者の安全と人権を最優先するため、充分な配慮と注意を払った。北海道医療大学看護福祉学研究科倫理審査委員会に申請し、承認を得た。（承認番号18N028028）

質問紙の表紙に、調査協力依頼文ならびに説明文を掲載した。説明文には研究の目的と意義、調査対象者の匿名性を確保し、得られたデータは研究目的以外では使用しないこと、調査協力は自由意志であり、辞退しても不利益を被らないことを明記し、同意する場合回答し回収箱に投入していただくこととした。

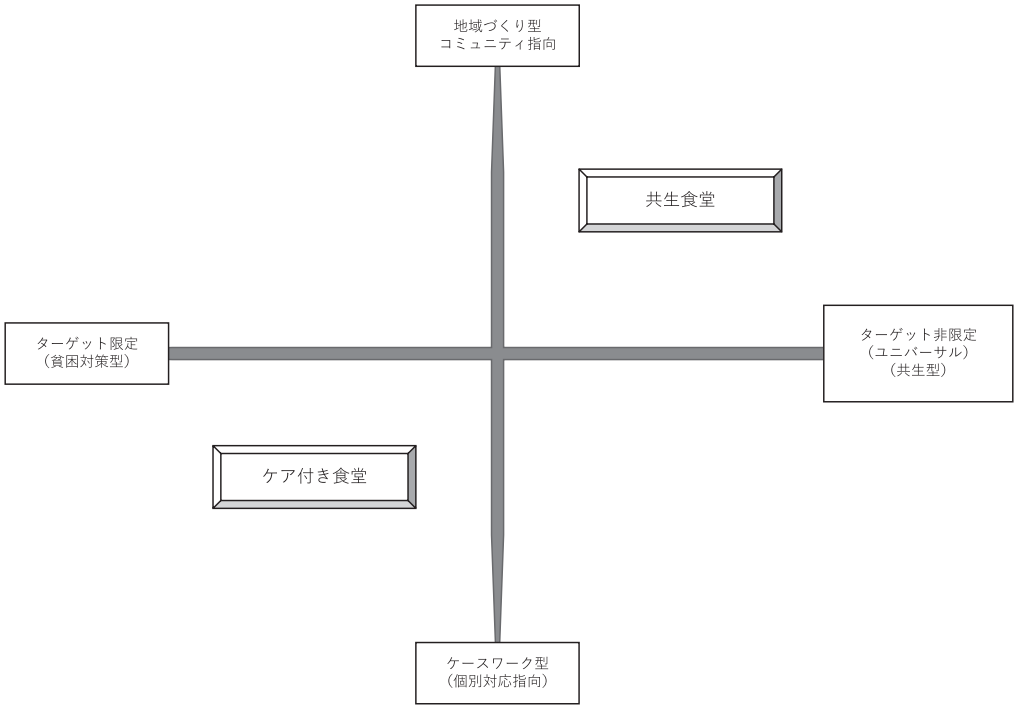
4．結果

（1）Cこども食堂の概要

Cこども食堂は地域の子どもに対して、子どもの貧困対策及び居場所づくりに関する事業をおこない、子どもの健全な発達・育成に寄与することを目的とし、2016年４月にプロジェクトチームが立ち上げられた。同年11月まで、月１回程度の打ち合わせを重ね、2016年12月に第１回を開催。原則毎月第２金曜日の17時頃から20時30分に開催している。さらに、通常の月１回のこども食堂事業のほか、夏休みや冬休み期間などに「体験教室」を実施している。その内容例は、杵と臼を使用した餅つきや、節分の豆まきといった年中行事的なもの、畑作業、昆虫とのふれあいといった自然遊び、流しそうめんといった季節を感じられるもの、ランプシェード作りなどの工作などである。

開催場所は、A市B地区にある地区会館の集会室A（89.1㎡）、集会室B（40.5㎡）の２部屋をつなぎ合わせた１部屋（129.6㎡。約71畳）で実施している。広いスペースを取っており、食後は子どもたちが集会室を中心に、自由に遊ぶことができる。実施者がおもちゃを複数準備して、それらを用いて参加している子どもや大人が、自由に一緒に遊ぶことができる。利用対象者は子どもだけに限らず、その保護者や地域の住民など広く受け入れている。このようなことから、Cこども食堂は対象者を限定せず、子どもも大人も参加が可能であり、食事だけではなく開催時間中実施者も含めた参加者同士が交流するこ

図１　湯浅（2016）が示したこども食堂の機能面の分類を筆者一部改変



とができる、「共生食堂」（湯浅2016）に分類される。（図１）

Cこども食堂の利用者数（2016年12月から2019年１月）は図２のとおりである。この期間の月平均参加人数は、子ども約17名、保護者約14名、単独参加の地域住民約５名で、合わせて月に約36名が参加している。調査日当日の利用者の子どもの年齢層は、０歳から６歳の未就学児が65％をしめ、同じく大人の年齢層は、41歳から45歳が44％であり最も多かった。

利用者のCこども食堂の利用回数は11回以上が67％と、開設当初から継続して利用している人が多かった。56％が自宅まで５分以内と回答しており、開催場所近隣の地域に根ざした存在となっていた。

運営スタッフの参加人数は記録がないため不明であるが、代表によるとスタッフ登録は10名で、各回平均４～５名で運営している。こども食堂で提供する料理は、調理師免許を持っているスタッフに一任しており、献立・仕込み・当日の調理まですべてを担っている。

（２）こども食堂利用者の主観的見解

１）こども食堂の満足度（図３）

集合調査法のため、調査バイアスがかかっていることは否定できないが、Cこども食堂に対する満足度は高く、特に「雰囲気」と「食事の味」に対する評価が高かった。自由回答にも「家庭料理のような食事」や「バランスの良い食事」であると、食事について高く評価されており、C食堂を継続して利用する理由の一つであると考えられる。

２）こども食堂開催時以外における参加者間の交流（図４）

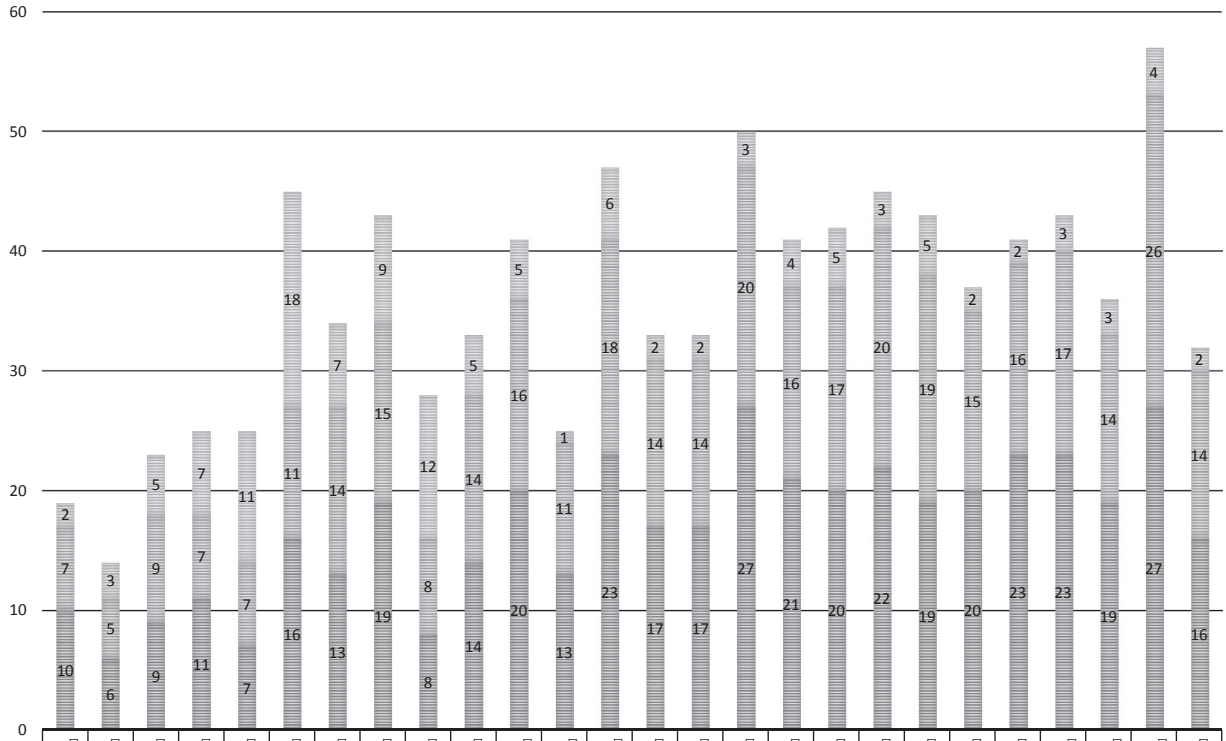
こども食堂開催時以外の参加者間の交流は、72％がもっていると回答した。交流方法は、メッセージアプリやメールなどで、日常的に交流をもっていることがわかった。また、メールなどによる日常的な交流はなくとも、こども食堂開催時に交流をもっている方もいた。こども食堂をきっかけとして、日常生活においても交流が広がっていることや、こども食堂に行くことにより、会うことができる人がいるという、ゆるやかな社会的つながりの場となっていた。

３）こども食堂に参加する理由（表１）

こども食堂に参加する理由について自由回答の質問を設定し、回答内容を分析協力者とともにグループ分けの上、タイトルをつけた。

以下、グループのタイトルを【　】で示し、回答者の

図２　Cこども食堂の参加状況



	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月
大人	2	3	5	7	11	18	7	9	12	5	5	1	6	2	2	3	4	5	3	5	2	2	3	3	4	2
保護者	7	5	9	7	7	11	14	15	8	14	16	11	18	14	14	20	16	17	20	19	15	16	17	14	26	14
子ども	10	6	9	11	7	16	13	19	8	14	20	13	23	17	17	27	21	20	22	19	20	23	23	19	27	16

図３　こども食堂の満足度

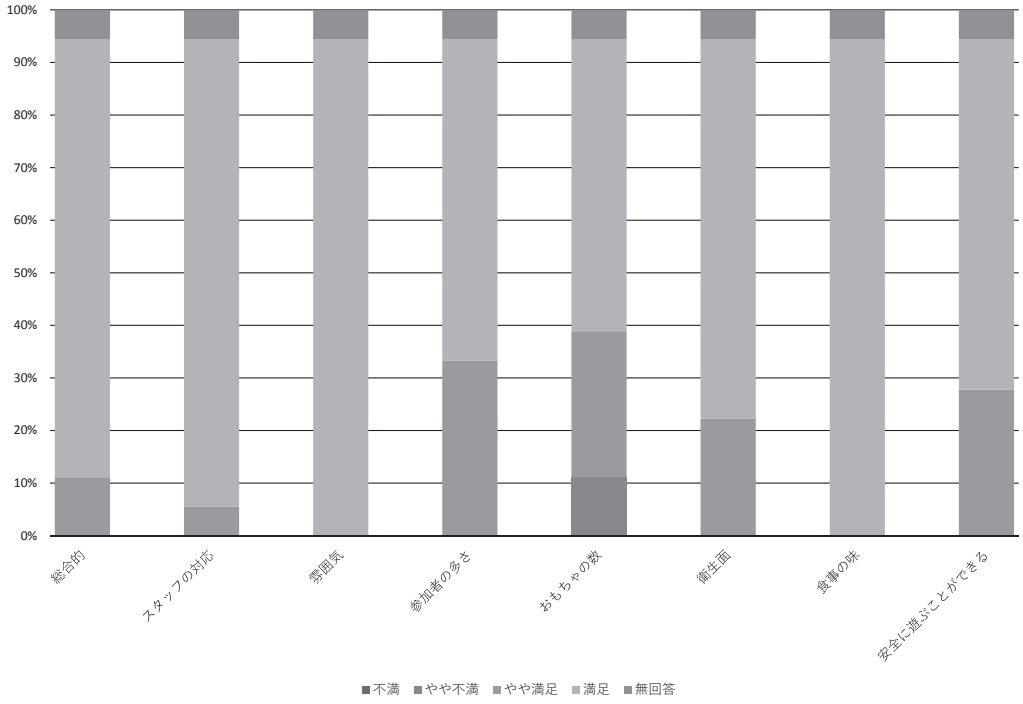
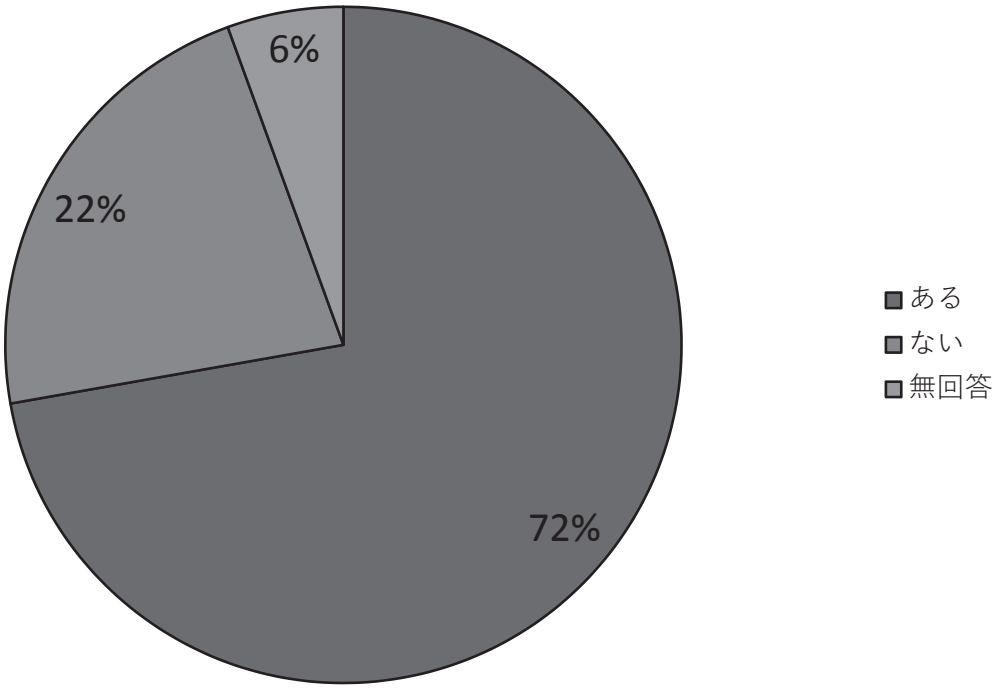


図４　こども食堂開催時以外における参加者間の交流



回答を、＜　＞で示す。

23の回答があり、【子どもが喜ぶ】【家事・育児からの解放】【子どもと触れ合う時間】【近所づきあいの場】【サポート】【非日常体験】の６のグループに分けることができた。

４）今後取り組んで欲しいこと（表２）

こども食堂に参加する理由について自由回答の質問を設定し、回答内容を分析協力者とともにグループ分けの上、タイトルをつけた。

10の回答があり、【子育てスキルのレクチャー】【今の活動の継続】【家ではできない体験】の３のグループに分けることができた。

５）こども食堂に期待すること（表３）

こども食堂に期待することについて自由回答の質問を設定し、回答内容を分析協力者とともにグループ分けの上、タイトルをつけた。

14の回答があり、【普段作らない家庭料理】【こども食堂の継続】【ご近所づきあいの場】【子どもにとっての思い出】の４のグループに分けることができた。

（３）こども食堂の効果

１）先行研究との比較

先行研究で示唆された、「実施者が評価する子ども食堂の効果」のサブカテゴリー項目（町田・長井・吉田2018：234）のうち、子ども、保護者に関わる項目を、分析協力者およびCこども食堂の代表者と検討した上で選択[1]。利用者に対し「子どもにとって」、「自分にとって」の主観的な効果の実感を、４件法で質問した。結果は図５-１、図５-２、図５-３で示したとおりである。

こども食堂の効果について、今回のアンケート調査の結果、先行研究を参考に作成した今回の調査項目全てにおいて、「効果がある」「やや効果がある」の回答が多かった。その中でも特に「効果がある」の回答が多かった項目が、「食事を楽しむ」「食べたことのないものを食べる」「元気になる」「楽しみの創出」であった。これは、先行研究で示されているカテゴリーにおいては「食生活の改善」や「気分の改善」「充実感の向上」となる。逆に、「就労支援」や「生活支援」、「非行防止」については、「やや効果がない」「効果がない」と回答した割合がやや高かった。

表１　こども食堂に参加する理由

グループ名	自由回答
子どもが喜ぶ	子どもが子ども食堂に来る子たちと遊ぶことを楽しみにしているため
	子どもが喜ぶので
	子ども達が楽しみにしている
	子どもが楽しく過ごせるから
	娘がとても楽しみにしています
家事・育児からの解放	夜ご飯を作る手間が省けるから
	私自身夕食を作らなくても良いので、よゆうが心身ともにできます
	大人はごはん支度をお休みして、おいしいご飯をいただけるから
	子どもを遊ばせられて、ごはんも食べられる
	子どもが遊べて食事も出来、自分もゆっくりできるため
	ご飯がおいしい
子どもと触れ合う時間	あそぶためです。
	月1回夕食の支度に追われず子どもとたっぷり遊ぶことが出来るから
ご近所づきあいの場	大人数で食事をして、子ども達同士でも遊べ、大人も色々おしゃべりできて気分転換になる
	みんなで家庭料理のような食事を出来る
	ママ友と夜におしゃべりできる！
	おいしいお食事を、ママ友と食べられる
	楽しい
	みなさんに会えるのが楽しみです
	子ども達が家族以外の大人と触れ合えるから
サポート	子ども食堂を応援したいので
非日常体験	普段と違う環境(自宅以外)で食事を摂る楽しみを、少しでも増やしたいと思いました。
	餅つきを体験させたかったので

表２　こども食堂に取り組んで欲しいこと

グループ名	自由回答
子育てスキルのレクチャー	ご飯をちゃんと食べてくれるコツをレクチャーして欲しい。
	絵本の読み聞かせ、昔遊びのレクチャー
今の活動の継続	特にない、今のままでOK
家ではできない体験	手品とかをみんなでちゃんと見る
	好きな楽器を持ち寄ってかんたんな演奏会みたいなものをみんなでやったり、ゲームをしたりしたいです。ハンカチ落としなどかんたんなもの、大人も子どももみんなで一緒に遊んだり
	昨年の流しそうめん、もちつき
	今回のもちつき、とても良いと思います。家庭ではなかなかできないことをして欲しいと思います。
	子どもが参加できるクラフトや料理教室
	ランプシェード作りのような体験型のもの
	流しそうめんやもちつきなど、ふだん家庭ではなかなかできない事が出来ると嬉しいです。

表３　こども食堂に期待すること

グループ名	自由回答
普段作らない家庭料理	バランスの良い食事、自分たちではおかず1品になるのでうれしい
	自分の作らない食事を子どもに食べさせられる
こども食堂の継続	今の状態で満足です
	長く続けていただけたらありがたいです
	大変だとは思うが、回数が増えるといい
ご近所づきあいの場	これからもみなさんと楽しく交流ができる場であってほしいです。
	子どもと大人他の交流
	今後も様々なかたと交流できる場所として開催していただけましたら幸いです。
	色々な子どもの年齢で集まるので、お兄ちゃんお姉ちゃん、赤ちゃんとふれあえるのがよいと思います。
	子ども達がのびのび楽しく過ご(さ)せて頂けること
	食を通じた場の提供
	家、こども、孤立の解消とか…
子どもにとっての思い出	子どもが面白いなーって思えれば◎
	子どもが楽しかった思い出として将来心に残っているといいな

---

[1]　今回の調査において、町田らの分析の結果の中から、実施した質問項目は次のとおりである。

優しくなる、思いやりを持つ、感性が豊かになる、自主性の向上になる、社会性の向上になる、自己肯定感の向上、様々なことを経験する、明るくなる、元気になる、穏やかになる、楽しみの創出、遊び場づくり、居場所づくり、実態把握、他の支援につなぐ、生活に必要な技術の習得、悩みの共有、貧困対策、就労支援、生活支援、好き嫌いの改善、少食の改善、孤食の防止、食事を楽しむ、食事のマナーが身につく、食べたことのないものを食べる、食育、貧困家庭の食事支援、育児相談、育児支援、情報交換、交流促進、孤立の防止、信頼の構築、非行防止、安全対策

先行研究で、こども食堂の「子どもに対する効果」としてあげられている、「貧困対策」、「居場所づくり」、「共食の増加」のうち、「貧困対策」に関して、今回の調査では「やや効果がある」と返答した割合が多く、「効果がある」と積極的な回答ではなかった。

2）こども食堂の効果についての自由回答（表４）

こども食堂の効果について自由回答で質問をおこない、分析協力者とともにグループ分けをおこない、タイトルをつけた。

14の回答があり、【つながりの促進】【食への関心】【親が子どもと触れ合う時間】【家事・育児の息抜き】【充実感】の５のグループに分けることができた。

表４　あなたが感じているこども食堂の効果

グループ名	自由回答
つながりの促進	まだまだ、10年20年後じゃないと効果、成果は出てこないかと。現状だと大人(ボランティア)が子どもと接する機会をうんでいること
	大人も子どもも、たくさんの人が笑顔になれる場所だと思います。
	皆さんの親切で明るくいつも楽しませていただいています。地域の雰囲気向上に繋がっていると思います。
	異年齢の子どもが一緒にイキイキと遊んでいるのがいいと思う
	家族、幼稚園以外の大人との交流が、安心へとつながっていると思います。(他人と温かみのある交流をしあえている)
	体験会を通して成長を感じます。みんなで作る工作姿はふだん見られないのでうれしいです。姪の成長もふだんみられない部分が見れてすごく成長を感じます。
	小さい子の面倒をみたり、一人っ子だけどお姉さんができてありがたい。
食への関心	大人数で楽しい食事をすることで、食べることの大切さなどを感じることができる
	好き嫌いに関係なく、食材を目にし、食べられる
親が子どもと触れ合う時間	夜はなかなか子どもと遊ぶ時間がないので、子ども食堂に参加してる時は遊んであげられるので、親も子どもにとってもよい。
家事・育児の息抜き	月1、ママのリフレッシュ、子どもはあそんでくれるから帰ってから、すぐ寝てくれる。
	慌ただしい日々の中で、ホッとできるから。
充実感	いつも楽しい場所とおいしいお食事をありがとうございます！！　子ども達は代表さん大好きで、いつもからんでいてすみません。月に1回の楽しみになっています。
	子どもの楽しみが増えた。

5．考察

（1）こども食堂の質的向上

こども食堂の質的向上について湯浅は、「保健衛生環境の整備、安定的な運営、豊富な体験メニューの提供、個別支援機能の強化、多世代交流拠点としての地域貢献」（湯浅2019：24）の視点を挙げている。今回の利用者へのアンケート調査の結果から、これらの項目について考察をおこなう。

1）保健衛生環境の整備

Cこども食堂では、調理師免許をもったスタッフが調理を担っている。調理者を１人に絞り実施することで、衛生面のリスク管理をおこなっているが、会館の小さな厨房で調理をおこなっている状況であり、ハード面での課題があることは否めない。2018年の農林水産省の調査では、こども食堂の開催会場について、約40％が「公共施設（公民館、児童館等）」（農林水産省2018：９）であることがわかっている。同調査では、「90％の子供食堂が、衛生管理に関する知識を持つ有資格者がいる」（農林水産省2018：11）とされているが、専門のキッチンを有しているわけではないため、ハード面だけではなく、衛生管理に関する有資格者が、保健所からの助言を受けるなど、ソフト面の工夫を充実させることが、衛生環境の質向上につながると考える。

保健に関する視点の１つとして、食育に焦点にあてると、食事メニューについて、＜家庭ではなかなか作ることができないメニューがある＞＜バランスの良い食事＞など、こども食堂には、ファミリーレストランやファストフードなどでの外食とは異なる、家庭的な料理への期待が概観された。農林水産省の調査（2018：18）においても、「主食・主菜・副菜を揃えている」、「旬の食材を使用すること」を70％以上のこども食堂が意識している。質の向上に向けては、季節を感じられる料理の提供や、食材の形を見ることができる料理や郷土料理の提供、子どもも含めた調理実習の機会など、子どもの食育に繋がるメニューの検討が求められるのではないかと考える。

2）安定的な運営

こども食堂の安定的な運営において重要なことの１つは、利用者にとって、そこが安心安全で、再び行きたい場所となっているかである。今回の調査項目の、「こども食堂に参加する理由」の自由回答においては、＜子どもが喜ぶ＞、＜子どもがこども食堂に来る子どもと遊ぶことを楽しみにしている＞、＜子ども達が楽しみにしている＞などといった、子どもが能動的に参加したがっていることがわかった。回答者の多くが、11回以上継続して参加していることを考えると、ただ単に、食事が食べられる場所だけではなく、とくに子どもにとって楽しい体験ができる場所であることが、こども食堂として重要な要素であることが考えられる。

民間発の自主的な活動であるこども食堂ではあるが、安定的な運営をおこなうには、経営の３原則である、いわゆるヒト・モノ・カネのマネジメントについても検討していかなければならない。

ヒトの視点では、中核としてマネジメントをおこなう人物だけではなく、継続参加できるスタッフの確保が求められる。地域の中でこども食堂に興味をもつ人に、どのようにアプローチをおこなうのか、また参加したボランティアが個々に目標や役割をもち、継続参加する動機付けが必要である。モノやカネの視点では、定期的に開催できる場所の確保や、調理器具、食器、食材の確保など多岐にわたる。これらヒト・モノ・カネの充実を、質の向上としてこども食堂単体だけで取り組むことは困難である。社会福祉法人には、社会福祉法第24条で、「社会福祉事業及び第26条第１項に規定する公益事業を行うに当たっては、日常生活又は社会生活上の支援を必要と

図５-１　こども食堂の効果について（子ども：子どもへの効果，自分：回答者自身への効果）①

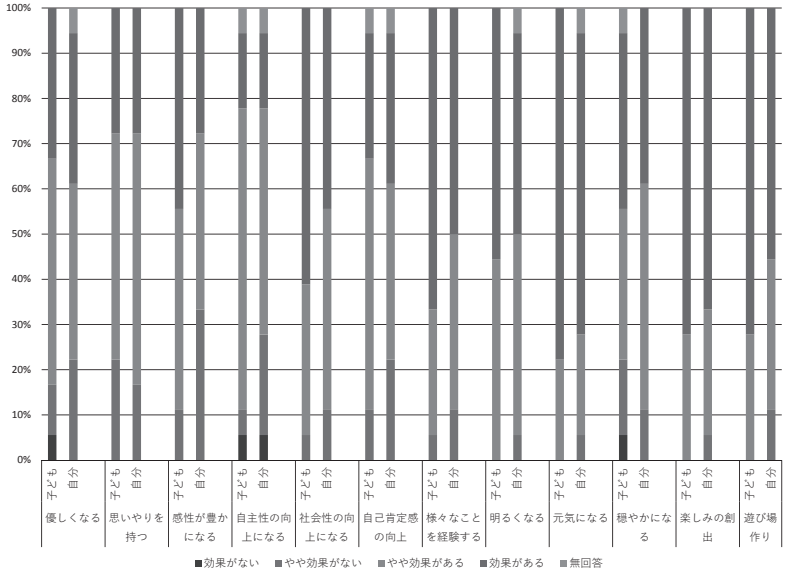


図５-２　こども食堂の効果について（子ども：子どもへの効果，自分：回答者自身への効果）②

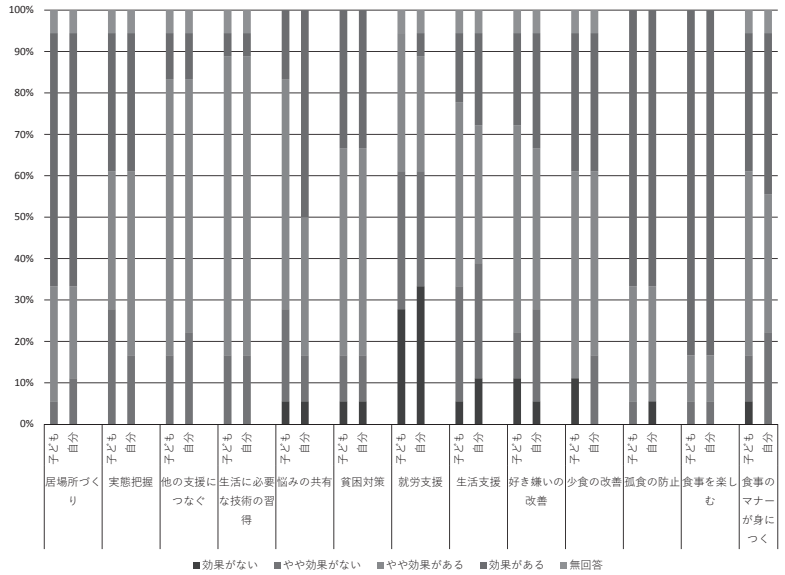
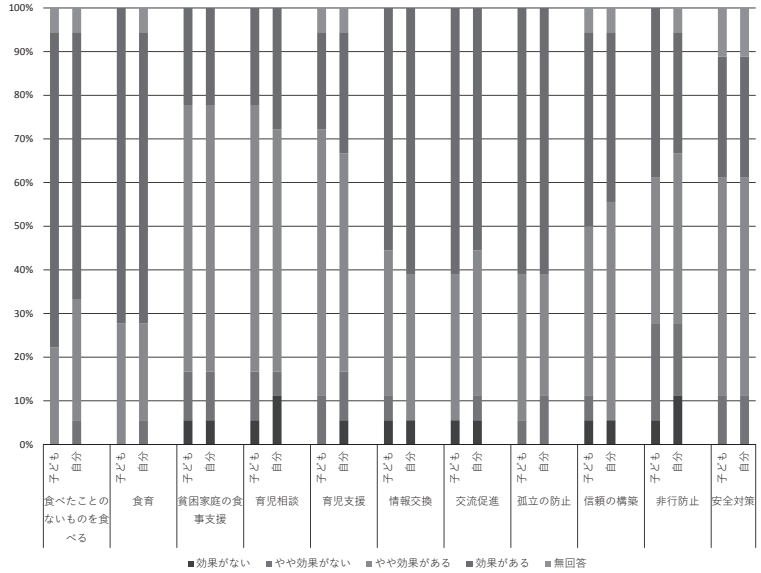


図５-３　こども食堂の効果について（子ども：子どもへの効果，自分：回答者自身への効果）③



する者に対して、無料又は低額な料金で、福祉サービスを積極的に提供するよう努めなければならない」という責務が課されている。厚生労働省（2018ｂ）の通知によると、「法人が単独で行わなければならないものではなく」とされており、「地域における公益的な取組」の例として、「子育て交流広場」や「ふれあい食堂」などを挙げている。地域の社会福祉法人との連携は、こども食堂にとっては、安定的な運営につながり、社会福祉法人にとっては、公益的な取組の実施負担の軽減となり、互いに有益であると考えられる。また、こども食堂を利用している利用者に協力を求めるなど、利用する側とされる側、双方向の支え合いで、こども食堂をともに創り上げるパートナーともなり、質的向上にもつながるのではないかと考える。

３）豊富な体験メニューの提供

今回のアンケート調査の自由回答の中で、年中行事の取り組みについて、＜ふだん家庭ではなかなかできない事が出来ると嬉しい＞との回答があった。都市部の居住環境や日々の仕事や家事の多忙さなどにより、子どもに体験させたいと思っていてもできないでいる年中行事があると考えられる。こども食堂の活動の中で親子一緒に、年中行事をおこなう機会がもてることに期待があることが考えられる。＜ランプシェードづくりのような体験型のもの＞への取り組みや、＜子どもが参加できるクラフト＞などの工作は、幼稚園、保育所などでも子どもは取り組み、親は完成品を受け取っているが、子どもの＜工作姿はふだん見られないのでうれしい＞、＜成長が感じられる＞といった回答があったように、その工程を共有できる喜びが示されていた。さらに、＜好きな楽器を持ち寄ってかんたんな演奏会みたいなものをみんなで＞や、＜ゲームを…したい＞、＜大人も子どももみんなで一緒に遊ぶ＞と、子どもだけではなく、大人も一緒に参加できる企画に期待が持たれていた。

大人向けの体験メニューの期待としては、＜食事のとらせ方をレクチャー＞、＜絵本の読み聞かせ＞、＜昔遊びのレクチャー＞など、子育てに関するスキルアップに関するものなどが挙げられていた。こども食堂実施中に参加型の企画として実施し、気軽に参加できる仕組みが望まれているのではないかと考える。

質の向上のためとはいえ、運営スタッフのほとんどをボランティアが担うこども食堂単体で、全てのニーズを充足することは困難である。そのため、既に地域にある地域資源を活用する事が有効であると考えられる。例えば、絵本の読み聞かせや工作などについて、地域にある保育所の保育士との連携や、保育系の大学、短大、専門学校の学生と連携することも有効ではないだろうか。学生は、こども食堂という場を活用し、保育技術の向上に取り組むことができる。こども食堂に参加する子どもや大人にとっても、絵本の読み聞かせや、その技術のレクチャーを受けることができるだけではなく、地域で専門職を育てるという新たな役割も発生する。子育てスキルに関するレクチャーは、自治体で提供している出前講座や、保健師、子育て支援をおこなっている民間団体との連携も有効であると考えられる。

４）個別支援機能の強化

こども食堂は「多様なこどもたちの課題を発見し、それらに何らかの形で対処する役割への期待」が高まることから、「“青信号”の顔をしていける場所という開放的な性質を維持しつつ、“赤信号”対応能力を高める」（湯浅2019：24）必要が求められている。そのために湯浅は、「“青信号”の顔をしてきた子や親が“黄信号”だとわかったとき、それに対処する方途、つなぐ先、相談先を確保しておけるのが望ましい」（湯浅2019：24）と主張している。

Cこども食堂のアンケートの自由回答において、＜ご飯をちゃんと食べてくれるコツをレクチャーして欲しい＞、＜絵本の読み聞かせ、昔遊びのレクチャー＞に取り組んでほしいとの希望が出されていた。誰もが直面する可能性がある子育ての悩みも、積み重なることでそれが“黄信号”や“赤信号”に変化することも否めない。

こども食堂は、「『あなたは大変なんだね』と認定されない場所」（湯浅2019：20）として参加できる場所であることが強みである。表立った相談コーナーとしての設置をおこなうことは、そこに座ることが、なんらかの困難を抱えている人と、相談者自身や他利用者が捉えてしまう可能性がある。あくまでも“青信号”の雰囲気を維持できるよう、誰もが悩む日常の些細な子育てスキルのレクチャーに関するプログラムの実施や、食事を摂りながら雑談のように相談がおこなえる、インフォーマル感を大切にすべきではないかと考える。困難を抱えている子どもや親の困難さに早期に気づき、必要なフォーマル、インフォーマルな社会資源を活用し“青信号”でいられるよう、こども食堂がもつ雰囲気を活かした、相談のしやすさは重要である。

５）多世代交流拠点としての地域貢献

今回の調査の自由記述には、＜小さい子の面倒をみたり、一人っ子だけどお姉さんができる＞＜大人が子どもと接する機会を生んでいる＞＜異年齢の子どもが一緒にイキイキと遊んでいる＞＜みなさんと楽しく交流ができる場＞＜様々な方と交流できる場所＞＜色々な子どもの年齢で集まるので、お兄ちゃんお姉ちゃん、赤ちゃんと

ふれあえる＞といった、食事の提供をおこなうだけではなく、多世代間が遊びや体験を通して交流出来る場所としての期待や、居場所としての役割が示されていた。また、利用者同士でメッセージアプリやSNS などを活用し、日常的に連絡を取り合っており、「子ども食堂の開催時間に限らず日常的にも…顔の見える関係性を構築する事が可能ではないか」（吉田2016：365）との仮説にも一致し、こども食堂をきっかけとした、多世代にわたる交友関係の広がりが示唆された。

このような同年齢異年齢の子どもたち同士の横のつながりや、地域の大人との繋がりは、奥山（2017）が、『新たな社会的養育の在り方に関する検討会』で示した、「児童福祉法の改正に基づき、子どもが家庭で育つ権利を基本としつつ、社会がその養育の一端を担うことが不可欠…社会的養護のみの観点からではなく、全ての家庭を対象とした社会的養育」の考え方につながる一助になると考えられる。この多世代の交流を発展させるには、介護予防への取り組みを地域で実施している、地域包括支援センターなどと連携を図ることも考えられる。地域で暮らす高齢者がこども食堂を訪れ、子どもと関わることで、自分自身の役割を感じられるだけではなく、プライベートにおける利用のきっかけにもなりうる。準備された受動的な地域交流から、高齢者自身の能動的な地域交流となり、介護予防だけではなく、地域コミュニティにおける多世代交流、見守り体制の構築につながるのではないかと考える。

（2）こども食堂の今後のあり方

本稿では、こども食堂の利用者調査からこども食堂の質の向上について考察をおこなった。自由回答を概観すると、こども食堂という食を通した場の提供により、子どもの成長を地域の大人と共有していく事ができることや、親自身が家事から解放され、我が子と遊ぶ時間を持てること、気分転換になるなど、吉田（2016）が示した子ども食堂の 3 つの機能、「食を通した支援」「居場所」「情緒的交流」のそれぞれについて、読み取る事ができる。

核家族、共働きが常態化し、多忙な日常の中で家事・育児の両立は心身の負担が大きくなっている。＜月 1 回夕食の支度に追われず子どもとたっぷり遊ぶことが出来る＞、＜夜はなかなか子どもと遊ぶ時間がないので、こども食堂に参加している時は遊んであげられる＞などの回答があった。こども食堂での食の提供は、家事から解放され＜リフレッシュ＞できるだけではなく、その解放された時間で、親が子どもと落ち着いて関わることができる時間も提供している。こども食堂に参加する理由の中で、＜子どもが行きたがる＞、＜子どもが喜ぶ＞といった回答が多くみられた。これは、子どもの視点からみても、多世代の子どもが集まり遊べる場としてだけではなく、親が家事から解放されたその時間を、子どものペースで親とゆっくりと関わりをもつことができるといった特別感を抱き、＜子どもが楽しかった思い出として将来心に残って＞いく場となっているのではないだろうか。これは、子どもの居場所として鍵となる、「子ども自身が主観的に感じられる幸福感や福祉…子どもの『主観的福祉』の視点」（田村2016：33）であると考えられる。

急激な増加を続けているこども食堂であるが、同時に閉鎖されるこども食堂もある。居場所としての役割をこども食堂が担っているのであれば、閉鎖されるということは、その地域から居場所がなくなるということであり、子どもに対する裏切りとなってしまう。それを防ぐためにも、安定した継続的な運営をはじめ、こども食堂の質的向上は重要である。しかし、こども食堂はあくまでも民間発の自主的な取り組みで、ボランティアによる運営がほとんどである。1 つのこども食堂だけで全てのニーズへの対応や課題の解決に取り組むことは困難である。先述したとおり、こども食堂がある地域のなかで、何かを提供したい人や機関、既に提供されているサービス、教育機関などに、こども食堂という場を提供することで、相互のニーズの補完と発展が可能になると考える。このようにこども食堂が、分野を超えた多機関、多職種の支援者も集まることができる、地域におけるハブ的な役割として機能していくことで、子どもから高齢者まで、誰もが集まる事ができる、安心安全な居場所となることができるのではないか。地域の多機関が主体的に関わることは、「単体の機関・団体では見落としがちなリスクへの着目と管理」（松岡2017：121）に発展し、湯浅（2019）が主張する、青信号の場所で黄信号を発見し、つないでいける場所となると考える。こども食堂の質の向上は、地域のなかで暮らしている、虐待リスクのグレーゾーンのケース、児童養護施設等を退所し、誰にも頼れず地域のなかで孤立しつつある当事者、親との不適切な関係に悩んでいる子ども自身にとっても、家庭や学校、職場以外における居場所となることが期待される。ただし、こども食堂に高い専門性を求めることについては疑問がある。こども食堂に繋がったから見守りができている、解決したということではなく、フォーマルな専門機関との連携は必須である。

6．終わりに

調査結果を参考として、Cこども食堂では、子育て支援をおこなっているNPOとの連携や、保育系専門学校か

らのボランティアの受け入れなどをはじめている。

今回のアンケート調査では、1箇所のこども食堂に対しての実施であったため、こども食堂の質的向上の視点を一般化できるものではない。

こども食堂はその地域ごと、こども食堂ごとに独自性があるものである。こども食堂の独自性と多様性を活かしつつ質的向上をおこなうためにも、各こども食堂が利用者とともに事業内容の棚卸を実施し、その社会的インパクトを検証する必要があると考える。そのためには、各こども食堂が煩雑とならないよう、共通する質問項目を作成し、それに各こども食堂が独自の質問項目を挿入することで、自己評価ができるツール開発が今後必要ではないかと考える。

7．謝辞

こども食堂で寛いでいた時間に、多量の質問紙への取り組み、自由回答への丁寧な記載をおこなってくださった、Cこども食堂利用のみなさま、実施者のみなさま、質問紙の作成や分析において協力してくださった、社会的インパクト評価促進事業担当者に深く感謝申し上げます。

文献

石本雄真（2010）「こころの居場所としての個人的居場所と社会的居場所―精神的健康および本来感、自己有用感との関連から―」『カウンセリング研究』、72-78.

厚生労働省（2018a）『こども食堂の活動に関する連携・協力の推進及びこども食堂の運営上留意すべき事項の周知について』（https://www.mhlw.go.jp/content/000306888.pdf）2019. 1. 1. アクセス

厚生労働省（2018b）『社会福祉法人による「地域における公益的な取組」の推進について』（https://www.mhlw.go.jp/content/12601000/000336187.pdf）2019. 1. 1. アクセス

町田大輔・長井祐子・吉田亨（2018）「実施者が評価する子ども食堂の効果:自由記述を用いた質的研究」『日健教誌』26（3）、231-237.

松岡是伸（2017）「名寄市における子どもの学習支援・子ども食堂・子どもの居場所づくりの実践」『名寄市立大学コミュニティケア教育研究センター年報』35号、109-124.

道岡里佳・中村優子・岡田美友紀・中村彩子・野村公寿（2004）「地域における子育てサロンの有効性―参加者と運営者のアンケート調査を通して―」『藍野学院紀要』第18巻、89-94.

名古屋市（2013）『地域子育て支援センター利用者アンケート実施結果』（http://www.city.nagoya.jp/kodomoseishonen/cmsfiles/contents/0000097/97606/kouhyou.pdf）2019.1.1. アクセス

農林水産省（2018）「子供食堂と地域が連携して進める食育活動事例集」、1 -60.

田村光子（2016）「子どもの居場所の機能の検討」『植草学園短期大学研究紀要』第17号、31-42.

奥山眞紀子（2017）『「新たな社会的養育の在り方に関する検討会」成果として提示すべき事項～「社会的養護の課題と将来像」から「新たな社会的養育の構築」に向けて～』（https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-11901000-Koyoukintoujidoukateikyoku-Soumuka/0000163959.pdf）2019. 1. 1. アクセス

吉田祐一郎（2016）「子ども食堂活動の意味と構成要素の検討に向けた一考察―地域における子どもを主体とした居場所づくりに向けて―」『四天王寺大学紀要』第 62 号、355-368.

湯浅誠（2016）「『こども食堂』の混乱、誤解、戸惑いを整理し、今後の展望を開く（https://news.yahoo.co.jp/byline/yuasamakoto/20161016-00063123/）2019.1.1. アクセス

湯浅誠（2019）「こども食堂の過去・現在・未来」『地域福祉研究』（47）、14-26.

Consideration on quality improvement of children's cafeteria : Using social impact assessment

Hironobu KATAYAMA*

* Department of Social Work Practice, Social Welfare Course